雑筆

芥川龍之介

竹田

竹田は善き人なり。ロオランなどの評価を学べば、善き画描き以上の人なり。世にあらば知りたき画描き、大雅を除けばこの人だと思ふ。友だち同志なれど、山陽の才子ぶりたるは、竹田より遥に品下れり。山陽が長崎に遊びし時、狭斜の遊あるを疑はれしとて、「家有縞衣待吾返、孤衾如水已三年」など云へる詩を作りしは、聊眉に唾すべきものなれど、竹田が同じく長崎より、「不上酒閣　不買歌鬟償　周文画筆頭水　墨余山」の詞を寄せたるは、恐らく真情を

吐露せしなるべし。竹田は詩書画三絶を称せられしも、和歌などは巧ならず。画道にて悟入せし所も、三十一文字の上には一向利き目がないやうなり。その外香や茶にも通ぜし由なれど、その道の事は知らざれば、何ともわれは定め難し。面白きは竹田が茸の画を作りし時、頼みし男仏頂面をなしたるに、竹田「わが苦心を見給へ」とて、水に浸せし椎茸を大籠に一杯見せたれば、その男感歎してやみしと云ふ逸話なり。竹田が刻意励精はさる事ながら、俗人を感心させるには、かう云ふ事にまさるものなし。大家の苦心談などと云はるる中、人の悪き名人が、凡下の徒を翻弄する為に

仮作したものも少くあるまい。山陽などはどうもやりさうなり。竹田になるとそんな悪戯気(いたづらぎ)は、嘘にもあつたとは思はれず。返す返すも竹田は善き人なり。「田能村(たのむら)竹田」と云ふ書を見たら、前より此の人が好きになつた。この書は著者大島支郎(おほしましらう)氏、売る所は豊後国(ぶんごのくに)大分(おほいた)の本屋忠文堂(ちうぶんだう)（七月二十日）

奇聞

大阪の或る工場(こうじやう)へ出入(でいり)する辨当屋の小娘あり。職工の一人(ひとり)、その小娘の頬(ほほ)を舐(な)めたるに、忽ち発狂した

る由。
　亜米利加（アメリカ）の何処（どこ）かの海岸なり。海水浴の仕度（したく）をしてゐる女、着物を泥棒に盗まれ、一日近くも脱衣場から出る事出来ず。その後（のち）泥棒はつかまりしが、罪名は女の羞恥心（しうちしん）を利用したる不法檻禁罪（ふはふかんきんざい）なりし由。
　電車の中で老婦人に足を踏まれし男、忌々（いまいま）しければ向うの足を踏み返したるに、その老婦人忽ち演説を始めて曰（いはく）、「皆さん。この人は唯今私が誤まつて足を踏んだのに、今度はわざと私の足を踏みました。云々（うんぬん）」と。踏み返した男、とうとう閉口（へいこう）してあやまりし由。その老婦人は矢島楫子（やじまかぢこ）女史か何かの子分ならん。

世の中には嘘のやうな話、存外あるものなり。皆小穴一遊亭に聞いた。（七月二十三日）

芭蕉

又猿簑を読む。芭蕉と去来と凡兆との連句の中には、波瀾老成の所多し。就中こんな所は、何とも云へぬ心もちにさせる。

ゆかみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やふり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来

芭蕉が「草庵に暫く居ては打やぶり」と付けたる付け方、徳山(とくさん)の棒が空に閃(ひらめ)くやうにして、息もつまるばかりなり。どこからこんな句を拈(ねん)して来るか、恐しと云ふ外(ほか)なし。この鋭さの前には凡兆と雖(いへど)も頭が上(あが)るかどうか。

凡兆と云へば下(しも)の如き所あり。

　昼ねふる青鷺(あをさぎ)の身のたふとさよ　蕉

　しよろしよろ水に藺(ゐ)のそよくらん　兆

これは凡兆(ぼんてう)の付け方、未(いま)だしきやうなり。されどこの芭蕉の句は、なかなか世間並(なみ)の才人が筋斗(きんと)百回した所が、付けられさうもないには違ひなし。

たつた十七字の活殺なれど、芭蕉（ばせを）の自由自在には恐れ入つてしまふ。西洋の詩人の詩などは、日本人故わからぬせゐか、これ程えらいと思つた事なし。まづ「成程（なるほど）」と云ふ位な感心に過ぎず。されば芭蕉のえらさなども、いくら説明してやつた所が、西洋人にはわかるかどうか、疑問の中（うち）の疑問なり。（七月十一日）

蜻蛉

蜻蛉（とんぼ）が木の枝にとまつて居（ゐ）るのを見る。羽根（はね）が四（よ）枚平（たひら）に並んでゐない。前の二枚が三十度位あがつてゐ

る。風が吹いて来たら、その羽根で調子を取つてゐた。木の枝は動けども、蜻蛉は去らず。その儘悠々と動いて居る。猶（なほ）よく見ると、風の吹く強弱につれて、前の羽根の角度が可成（かなり）いろいろ変る。色の薄い赤蜻蛉。木の枝は枯枝。見たのは崖（がけ）の上なり。（八月十八日青根温泉にて）

子供

子供の時分の事を書きたる小説はいろいろあり。されど子供が感じた通りに書いたものは少し。大抵（たいてい）は

大人（おとな）が子供の時を回顧して書いたと云ふ調子なり。その点では James Joyce が新機軸を出したと云ふべし。

ジヨイスの A Portrait of the Aritist as a Young Man は、如何（いか）にも子供が感じた通りに書いたと云ふ風なり。或は少し感じた通りに書き候（さふらふ）と云ふ気味があるかも知れず。されど珍品は珍品なり。こんな文章を書く人は外（ほか）に一人（ひとり）もあるまい。読んで好（い）い事をしたりと思ふ。（八月二十日）

十千万堂日録

十千万堂日録（とちまんだうにちろく）一月二十五日の記に、紅葉（こうえふ）が諸弟子（しよでし）と芝蘭簿（しらんぼ）の記入を試む条（くだり）あり。風葉（ふうえふ）は「身長今一寸（いつすん）」を希望とし、春葉（しゆんえふ）は「四十迄生きん事」を希望とし、紅葉は「欧洲大陸にマアブルの句碑を立つ」を希望とす。更に又春葉は書籍に西遊記（さいいうき）を挙げ、風葉は「あらゆる字引類」を挙げ、紅葉はエンサイクロピデイアを挙ぐ。紅葉の好み、諸弟子（しよでし）に比ぶれば、頗（すこぶる）西洋かぶれの気味あり。されどその嫌味なる所に、返つて紅葉の器量の大が窺（うかが）ひ知られるやうな心もちがする。

それから又二十三日の記に、「此夜（よ）（八）の八を草して黎明（れいめい）に至る。終（つひ）に脱稿せず。たうときものは寒夜（かんや）の

炭。」とあり。何（なん）となく嬉しきくだりなり。（八）は金色夜叉（こんじきやしや）の（八）。（八月二十一日）

隣室

「姉（ねえ）さん。これ何？」

「ゼンマイ。」

「ゼンマイ珈琲（コオヒイ）ってこれから拵（こしら）へるんでせう。」

「お前さん莫迦（ばか）ね。ちつと黙つていらつしやいよ。そんな事を云つちや、私（わたし）がきまり悪くなるぢやないの。あれは玄米（げんまい）珈琲よ。」

姉は十四五歳。妹は十二歳の由。この姉妹(しまい)二人(ふたり)ともスケッチ・ブックを持って写生に行く。雨降りの日は互に相手の顔を写生するなり。父親は品(ひん)のある五十恰好(がっかう)の人。この人も画(ゑ)の嗜(たしな)みありげに見ゆ。（八月二十二日青根温泉にて）

若さ

木米(もくべい)は何時(いつ)も黒羽二重(くろはぶたへ)づくめなりし由。これ贅沢(ぜいたく)に似て、反(かへ)つて徳用なりと或人云へり。その人又云ひしは、されどわれら若きものは、木米(もくべい)の好みの善きこと

も重々承知はしてゐれど、黒羽二重づくめになる前に、もつといろいろの事をして見たい気ありと。この言葉はそつくり小説を書く上にも当て嵌るやうなり。どう云ふ作品が難有きか、そんな事は朧げながらわかつてゐれど、一図にその道へ突き進む前に、もつといろいろな行き方へも手を出したい気少からず。こは偸安と云ふよりも、若きを恃む心もちなるべし。この心もちに安住するは、余り善い事ではないかも知れず、云はば芸術上の蕩子ならんか。（八月二十三日）

痴情

男女の痴情を写尽せんとせば、どうしても房中の事に及ばざるを得ず。されどこは役人の禁ずる所なり。故に小説家は最も迂遠な仄筆を使つて、やつと十の八九を描く事となる。金瓶梅が古今無双の痴情小説たる所以は、一つにはこの点でも無遠慮に筆を揮つた結果なるべし。あれ程でなくとも、もう少し役人がやかましくなければ、今より数等深みのある小説が生まれるならん。

金瓶梅程の小説、西洋に果してありや否や。ピエル・ルイのAphroditeなども、金瓶梅に比ぶれば、子

供の玩具（おもちや）も同じ事なり、尤（もつと）も後者は序文にある通り、楽欲主義（げうよくしゆぎ）と云ふ看板もあれば、一概に比ぶるは不都合（ふつがふ）なるべし。（八月二十三日）

竹

後（うしろ）の山の竹藪を遠くから見ると、暗い杉や檜（ひのき）の前に、房々（ふさふさ）した緑が浮き上つて居る。まるで鳥の羽毛（うまう）のやうになり。頭の中で拵（こしら）へた幽篁（いうくわう）とか何（なん）とか云ふ気はしない。支那人は竹が風に吹かるるさまを、竹笑（ちくせう）と名づける由、風の吹いた日も見てゐたが、一向（いつかう）竹笑ら

しい心もち起らず。又霧の深い夕方出て見たら、皆ぼんやり黒く見える所、平凡な南画じみてつまらなかつた。それより竹藪の中にはひり、竹の皮のむけたのが、裏だけ日の具合（ぐあひ）で光るのを見ると、其処（そこ）らに蛞蝓（なめくぢ）が這（は）つてゐさうな、妙な無気味（ぶきみ）さを感ずるものなり。（八月二十五日青根温泉にて）

貴族

貴族或は貴族主義者が思ひ切つてうぬぼれられないのは、彼等も亦（また）われら同様、厠（かはや）に上（のぼ）る故なるべし。さ

もなければ何処の国でも、先祖は神々のやうな顔をするかも知れず。徳川時代の大諸侯は、参覲交代の途次旅宿へとまると、必大恭は砂づめの樽へ入れて、後へ残さぬやうに心がけた由。その話を聞かされたら、彼等もこの弱点には気づいてゐたと云ふ気がしたり。これをもつと上品に云へば、ニイチエが「何故人は神だと思はないかと云ふと、云々」の警句と同じになつてしまふだらう。（八月二十六日）

井月

信州伊那の俳人に井月と云ふ乞食あり、拓落たる道情、良寛に劣らず。下島空谷氏が近来その句を蒐集してゐる。「朝顔に急がぬ膳や残り客」「ひそひそと何料理るやら榾明り」「初秋の心づかひや味噌醤油」「大事がる馬の尾づつや秋の風」「落栗の座をさだむるや窪たまり」（初めて伊那に来て）「鬼灯の色にゆるむや畑の縄」等、句も天保前後の人にしては、思ひの外好い。辞世は「何処やらで鶴の声する霞かな」と云ふ由。憾むらくはその伝を詳にせず。唯犬が嫌ひだつたさうだ。（九月十日）

百日紅

自分の知れる限りにては、葉の黄ばみそむる事、桜より早きはなし。槐（ゑんじゆ）これに次ぐ。その代り葉の落ち尽す事早きものは、百日紅（さるすべり）第一なり。桜や槐の梢（こずゑ）にはまだ疎（まばら）に残葉（ざんえふ）があつても、百日紅ばかりは坊主（ばうず）になつてゐる。梧桐（あをぎり）、芭蕉（ばせう）、柳など詩や句に揺落（えうらく）を歌はるるものは、みな思ひの外（ほか）散る事遅し。一体（いつたい）百日紅と云ふ木、春も新緑の色洽（あまね）き頃にならば、容易に赤い芽を吹かず。長塚節（ながつかたかし）氏の歌に、「春雨（はるさめ）になまめきわたる庭ぬちにおろかなりける梧桐（あをぎり）の木か」とあれど、梧桐

の芽を吹くは百日紅よりも早きやうなり。朝寝も好きなら宵寝も好きなる事、百日紅の如きは滅多になし。自分は時々この木の横着なるに、人間同様腹を立てる事あり。（九月十三日）

大作

亀尾君訳エツケルマンのゲエテ語録の中に、少壮の士の大作を成すは労多くして功少きを戒めてやまざる一段あり。蓋ゲエテ自身ファウストなどを書かんとして、懲り懲りした故なるべし。思へばトルストイも

「戦争と平和」や「アンナ・カレニナ」の大成に没頭せしかば、遂には全欧九十年代の芸術がわからずなりしならん。勿論他人の芸術がわからずとも、トルストイのやうな堂々たる自家(じか)の芸術を持つてゐれば、毛頭(まうとう)差支(さしつか)へはなきやうなり。されどわかるわからぬの上より云へば、芸術論を書きたるトルストイは、寧(むし)ろ憐むべき鑑賞眼の所有者たりし事は疑ひなし。まして我々下根(げこん)の衆生(しゆじやう)は、好(い)い加減な野心に煽動(せんどう)されて、柄(がら)にもない大作にとりかかつたが最期(さいご)、虻蜂(あぶはち)とらずの歎(たん)を招くは、わかり切つた事かも知れず。とは云ふものの自分なぞは、一旦大作を企つべき機縁が熟したと思つた

ら、ゲエテの忠告も聞えぬやうに、忽(たちまち)いきり立つてしまひさうな気がする。(九月二十六日)

水怪

河童(かつぱ)の考証は柳田国男(やなぎだくにを)氏の山島民譚集(さんたうみんたんしふ)に尽してゐる。御維新前(ごゐしんぜん)は大根河岸(だいこんがし)の川にもやはり河童が住んでゐた。観世新路(くわんぜじんみち)の経師屋(きやうじや)があの川へ障子を洗ひに行つてゐると、突然後(うしろ)より抱(だ)きつきて、無暗(むやみ)にくすぐり立てるものあり。経師屋閉口して、仰向(あふむ)けに往来(わうらい)へころげたら、河童一匹背中を離れて、川へどぶんと飛びこみし由、

幼時母より聞きし事あり。その後万年橋の下の水底に、大緋鯉がゐると云ふ噂ありしが、どうなつたか詳しくは知らず。父の知人に夜釣りに行つたら、吾妻橋より少し川上で、大きなすつぽんが船のともへ、乗りかかるのを見たと云ふ人あり。そのすつぽんの首太き事、鉄瓶の如しと話してゐた。東京の川にもこんな水怪多し。田舎へ行つたら猶の事、未に河童が芦の中で、相撲などとつてゐるかも知れない。偶一遊亭作る所の河太郎独酌之図を見たから、思ひ出した事を記しとどめる。（九月三十日）

器量

天龍寺（てんりゆうじ）の峨山（がざん）が或雪後の朝、晴れた空を仰ぎながら、「昨日（きのふ）はあんなに雪を降らせた空が、今朝（けさ）はこんなに日がさしてゐる。この意気でなくては人間も、大きな仕事は出来ないな」と云ひし由。今夜それを読んだら、叶（かな）はない気がした。僅（わづか）百枚以内の短篇を書くのに、悲喜交（こもごも）至つてゐるやうでは、自分ながら気の毒千万なり。この間（あひだ）も湯にはひりながら、湯にはひる事その事は至極簡単なのに、湯にはひる事を書くとなると中々容易でないのが不思議だつた。同時に又不愉快だ

つた。されど下根（げこん）の衆生（しゆじやう）と生まれたからは、やはり辛抱（しんばう）専一に苦労する外はあるまいと思ふ。（十月三日）

誤謬

Ars longa, vita brevis を訳して、芸術は長く人生は短しと云ふは好（よ）い。が、世俗がこの句を使ふのを見ると、人亡べども業顕（わざあら）はると云ふ意味に使つてゐる。あれは日本人或は日本の文士だけが独り合点（がてん）の使ひ方である。あのヒポクラテエスの第一アフオリズムには、さう云ふ意味ははひつて居らぬ。今の西人（せいじん）がこの句を

使ふのも、やはりさう云ふ意味には使つて居らぬ。芸術は長く人生は短しとは、人生は短い故刻苦精励を重ねても、容易に一芸を修める事は出来ぬと云ふ意味である。こんな事を説き明かすのは、中学教師の任かも知れぬ。しかし近頃は我々に教へ顔をする批評家の中にさへ、このはき違へを知らずにゐるものもある。それでは文壇にも気の毒なやうだ。そんな意味に使ひたくば、希臘(ギリシヤ)の哲人の語を借らずとも、孫過庭(そんくわてい)なぞに人亡業顕(ひとほろべどもわざあらはる)云々(うんぬん)の名文句が残つてゐる。序(ついで)ながら書いて置くが、これからの批評家は、「ランダアやレオパルデイのイマジナリイ・コムヴアセエシヨン」など

と出たらめの気焔を挙げてゐてはいけぬ。そんな事ではいくら威張つても、衒学の名にさへ価せぬではないか。徒に人に教へたがるよりは、まづ自ら教へて来るが好い。（十月五日）

不朽

人命に限りあればとて、命を粗末にして好いとは限らず。なる可く長生をしようとするのは、人各々の分別なり。芸術上の作品も何時かは亡ぶのに違ひなし。画力は五百年、書力は八百年とは、王世貞既にこれ

を云ふ。されどなる可く長持ちのする作品を作らうと思ふのは、これ亦（また）我々の随意なり。かう思へば芸術の不朽を信ぜざると、後世に作品を残さんとするとは、格別矛盾（むじゆん）した考へにもあらざるべし。さらば如何（いか）なる作品が、古くならずにゐるかと云ふに、書や画（ぐわ）の事は知らざれども、文芸上の作品にては簡潔（かんけつ）なる文体が長持ちのする事は事実なり。勿論文体即（すなはち）作品と云ふ理窟なければ、文体さへ然らばその作品が常に新（あらた）なりとは云ふべからず。されど文体が作品の佳否（かひ）に影響する限り、絢爛（けんらん）目を奪ふ如き文体が存外（ぞんぐわい）古くなる事は、殆（ほとんど）疑なきが如し。ゴオテイエは今日（こんにち）読むべからず。

然れどもメリメエは日に新(あらた)なり。これを我朝の文学に見るも、鷗外(おうぐわい)先生の短篇の如き、それらと同時に発表されし「冷笑」「うづまき」等の諸作に比ぶれば、今猶清新の気に富む事、昨日(きのふ)校正を済まさせたと云ふとも、差支(さしつか)へなき位ならずや。ゾラは嘗(かつ)て文体を学ぶに、ヴオルテエルの簡(かん)を宗(むね)とせずして、ルツソオの華(くわ)を宗(むね)とせしを歎き、彼自身の小説が早晩古くなるべきを予言したる事ある由、善く己(おのれ)を知れりと云ふべし。されど前にも書きし通り、文体は作品のすべてにあらず。文体の如何(いかん)を超越したる所に、作品の永続性を求むれば、やはりその深さに帰着するならん。「凡そ事物の

能く久遠に垂るる者は、（中略）切実の体あるを要す」（芥舟学画編）とは、文芸の上にも確論だと思ふ。（十月六日）

流俗

思ふに流俗なるものは、常に前代には有用なりし真理を株守する特色あり。尤も一時代前、二時代前、或は又三時代前と、真理の古きに従つて、いろいろの流俗なきにあらず。さらば一時代の長さ幾何かと云へば、これは時と処とにより、一概には何年と定め難し。ま

づ日本ならば一時代約十年とも申すべきか。而（しか）して普通流俗が学問芸術に害をなす程度は、その株守する真理の古さと逆比例するものなり。たとへば武士道主義者などが、今日（こんにち）子供の悪戯（いたづら）程も時代の進歩を害せざるは、この法則の好例なるべし。故に現在の文壇にても、人道主義の陣笠（ぢんがさ）連は、自然主義の陣笠連より厄介物（やくかいもの）たるを当然とす。（十月七日）

木犀（もくせい）

牛込（うしごめ）の或町を歩いてゐたら、誰の屋敷か知らないが、

黒塀（くろべい）の続いてゐる所へ出た。今にも倒れてしまひさうな、ひどく古い黒塀だつた。塀の中には芭蕉（ばせう）や松が、凭（もた）れ合ふやうに一杯茂つてゐた。其処（そこ）を独り歩いてゐると、冷たい木犀（もくせい）の匂（にほひ）がし出した。何だかその匂が芭蕉や松にも、滲（し）み透（とほ）るやうな心もちがした。すると向うからこれも一人（ひとり）、まつすぐに歩いて来る女があつた。やがて側へ来たのを見たら、何処（どこ）かで見たやうな顔をしてゐた。すれ違つた後（あと）でも考へて見たが、どうしても思ひ出せなかつた。が、何（なん）だか風流な気がした。それから賑（にぎやか）な往来へ出ると、ぽつぽつ雨が降つて来た。その時急にさつきの女と、以前遇（あ）つた所を思ひ出

した。今度は急に下司（げす）な気がした。四五日後折柴（せつさい）と話してゐると、底に穴を明けた瀬戸（せと）の火鉢へ、縁日物（えんにちもの）の木犀（もくせい）を植ゑて置いたら、花をつけたと云ふ話を聞かせられた。さうしたら又牛込で遇つた女の事を思ひ出した。が、下司（げす）な気は少しもなかつた。（十月十日）

Butler の説

サムエル・バトラアの説に云ふ。「モリエルが無智の老媼（らうう）に自作の台本を読み聞かせたと云ふは、何も老媼（らうう）の批評を正しとしたのではない。唯自ら朗読する

閒(あひだ)に、自ら台本の瑕疵(かし)を見出すが為である。かかる場合聴き手を勤むるものは、無智の老嫗に若(し)くものはあるまい」と。まことに一理ある説である。白居易(はくきよい)などが老嫗に自作の詩を読み聴(き)かせたと云ふのも、同じやうな心があつたのかも知れぬ。しかし自分がバトラアの説を面白しとするのは、啻(ただ)に一理あるが故のみではない。この説はバトラアのやうに創作の経験がある人でないと、道破されさうもない説だからである。成程(なるほど)世のつねの学者や批評家にも、モリエルの喜劇はわかるかも知れぬ。が、それだけでは立ちどころに、バトラアの説が吐(は)けるものではない。こんな消息(せうそく)に通

じるには、おのれの中（うち）にモリエルその人を感じてゐなければ駄目（だめ）である。其処（そこ）が自分には難有（ありがた）い気がする。ロダンの手記なぞが尊いのも、かう云ふ所が多い故だ。二千里外に故人の面（おもて）を見ようと思つたら、どうしても自（みづか）ら苦まねばならぬ。（十月十九日）

今夜

今夜は心が平かである。机の前にあぐらをかきながら、湯に溶（と）かしたブロチンを啜（すす）つてゐれば、泰平（たいへい）の民の心もちがする。かう云ふ時は小説なぞ書いてゐるの

が、あさましいやうにも考へられる。そんな物を書くよりは、発句（ほつく）の稽古（けいこ）でもしてゐる方が、余程（よほど）になるではないか。発句より手習ひでもしてゐれば、もつと事が足りるかも知れぬ。いや、それより今かうして坐つてゐる心もちがその儘難有（ありがた）いのを知らぬかなぞとも思ふ。おれは道書（だうしよ）も仏書（ぶつしよ）も読んだ事はない。が、どうもおれの心の底には、虚無の遺伝が潜んでゐるやうだ。西洋人がいくらもがいて見ても、結局はカトリツクの信仰に舞ひ戻るやうに、おれなぞはだんだん年をとると、隠棲（いんせい）か何かがしたくなるかも知れない。が、まだ今のやうに女に惚（ほ）れたり、金が欲しかつたりして

ゐる内は、到底《たうてい》思ひ切つた真似は出来さうもないな。尤《もつと》も仙人《せんにん》と云ふ中には、祝鶏翁《しゆくけいをう》のやうな蓄産家［＃「蓄産家」はママ］や郭璞《くわくぼく》のやうな漁色家《ぎよしよくか》がある。ああ云ふ仙人にはすぐになれさうだ。しかしどうせなる位なら、俗な仙人にはなりたくない。横文字の読める若隠居なぞは、猶更《なほさら》おれは真平《まつぴら》御免《ごめん》だ。そんなものよりは小説家の方が、まだしも道に近いやうな気がする。「尋仙未向碧山行《せんをたづねていまだむかはずへきざんのかう》 住在人間足道情《すんでじんかんにあるもだうじやうたる》」かな。何《なん》だか今夜は半可通《はんかつう》な独り語《ごと》ばかり書いてしまつた。

（十月二十日）

夢

世間の小説に出て来る夢は、どうも夢らしい心もちがせぬ。大抵（たいてい）は作為（さくゐ）が見え透くのである。「罪と罰」の中の困馬（こんば）の夢でも、やはりこの意味ではまことらしくない。夢のやうな話なぞと云ふが、夢を夢らしく書きこなす事は、好（い）い加減な現実の描写（べうしや）よりも、反（かへ）つて周到な用意が入る。何故（なぜ）かと云ふと夢中の出来事は、時間も空間も因果の関係も、現実とは全然違つてゐる。しかもその違ひ方が、到底（たうてい）型には嵌（は）める事が出来ぬ。だから実際見た夢でも写さない限り、夢らしい夢を書

く事は、殆(ほとんど)不可能と云ふ外はない。所が小説中夢を道具に使ふ場合は、その道具の目的を果す必要上、よくよく都合(つがふ)の好(い)い夢でも見ねば、実際見た夢を書く訣(わけ)に行(ゆ)かぬ。この故に小説に出て来る夢は、善(よ)く行つた所がドストエフスキイの困馬の夢を出難(でがた)いのである。しかし実際見た夢から、逆に小説を作り出す場合は、その夢が夢として書かれて居らぬ時でも、夢らしい心もちが現れる故、往々神秘的な作品が出来る。名高い自殺倶楽部(クラブ)の話なぞも、ステイヴンソンがあの落想(らくさう)を得たのは、誰かが見た夢の話からだと云ふ。この故にさう云ふ小説を書かうと思つたら、時々の夢を記して

置くが好(よ)い。自分なぞはそれも怠つてゐるが、ドオデエには確か夢の手記があつた。わが朝(てう)では志賀直哉(しがなほや)氏に、「イヅク川」と云ふ好小品がある。(十月二十五日)

日本画の写実

日本画家が写実にこだはつてゐるのは、どう考へても妙な気がする。それは写実に進んで行つても、或程度の成功を収められるかも知れぬ。が、いくら成功を収めたにしても、洋画程写実が出来る筈はない。光だの、空気だの、質量だのの感じが出したかつたら、

何故さきにパレツトを執らないのか。且又さう云ふ感じを出さうとするのは、印象派が外光の効果を出さうとしたのとは、余程趣が違つてゐる。仏人は一歩先へ出たのだ。日本画家が写実にこだはるのは、一歩横へ出ようとするのだ。自分は速水御舟氏の舞妓の画なぞに対すると、如何にも日本画に気の毒な気がする。昔芳幾が描いた写真画と云ふ物は、あれと類を同じくしてゐたが、求める所が鄙俗なだけ、反つてあれ程嫌味はない。甚失礼な申し分ながら、どうも速水氏や何かの画を作る動機は、存外足もとの浮いた所が多さうに思はれてならぬのである。(十一月一日)

理解

一時は放蕩(はうたう)さへ働けば、一かど芸術がわかるやうに思ひ上(あが)つた連中がある。この頃は道義と宗教とを談ずれば、芭蕉(ばせを)もレオナルド・ダ・ヴインチも一呑(ひとの)みに呑みこみ顔をする連中がある。ヴインチは兎(と)も角(かく)も、芭蕉さへ一通り偉さがわかるやうになるのは、やはり相当の苦労を積まねばならぬ。ことによると末世(まつせ)の我々には、死身(しにみ)に思ひを潜(ひそ)めた後(のち)でも、まだ会得(ゑとく)されない芭蕉の偉さが残つてゐるかも知れぬ位だ。ジアン・ク

リストフの中に、クリストフと同じやうにベエトオフエンがわかると思つてゐる俗物を書いた一節がある。わかると云ふ事は世間が考へる程、無造作に出来る事ではない。何事も芸道に志したからは、わかつた上にもわからうとする心がけが肝腎なやうだ。さもないと野狐に堕してしまふ。偶電気と文芸所載の諸家の芭蕉論の中に、一二孟浪杜撰の説を見出した故に、不平のあまり書きとどめる。（十一月四日）

茶釜の蓋置き

今日(けふ)香取秀真(かとりほづま)氏の所にゐたら、茶釜の蓋(ふた)置きを三つ見せてくれた。小さな鉄の五徳(ごとく)のやうな物である。それが三つとも形が違ふ。違ふと云つた所が五徳同様故、三本の足と環(くわん)との釣合ひが、僅(わづか)に違つてゐるに過ぎない。が三つとも明らかに違ふ。見てゐれば見てゐる程愈(いよいよ)違ひが甚しい。一つは荘重な心もちがする。一つは気の利(き)いた、洒脱(しやだつ)な物である。最後の一つは見るに堪へぬ。これ程簡単な物にもこれ程出来の違ひがあるかと思つたら、何事も芸道は恐しい気がした。一刀一拝の心もちが入るのは、仏(ほとけ)を刻む時ばかりでないと云ふ気がした。名人の仕事に思ひ比べれば、我々の

書き残した物なぞは、悉（ことごと）く焚焼（ふんせう）しても惜しくはないと云ふ気がした。考へれば考へる程、愈（いよいよ）底の知れなくなるものは天下に芸道唯一つである。（十二月十日）

西洋人

茶碗（ちやわん）に茶を汲（く）んで出すと、茶を飲む前にその茶碗を見る。これは日本人には家常茶飯（かじやうさはん）に見る事だが、西洋人は滅多（めつた）にやらぬらしい。「結構な珈琲（コオヒイ）茶碗でございます」などと云ふ言葉は、西洋小説中にも見えぬやうである。それだけ日本人は芸術的なのかも知れぬ。或

はそれだけ日本人の芸術は、細(こまか)い所にも手がとどくのかも知れぬ。リイチ氏なぞは立派(りつぱ)な陶工だが、皿や茶碗の仕事を見ると、裏には心がはひつて居らぬやうだ。これなぞも誰か注意さへすれば、何(なん)でもない事だとは云ふものの、其処(そこ)に争はれぬ西洋人を感ずるやうな心もちがする。（十一月十日）

粗密と純雑

粗密(そみつ)は気質の差によるものである。粗を嫌ひ密を喜ぶのは、各(おのおの)好む所に従ふが好(よ)い。しかし粗密と純雑

とは、自(おのづか)ら又異(ことな)つてゐる。純雑は気質の差のみではない。更に人格の深処に根ざした、我々が一生の一大事である。純を尊び雑を卑(いやし)むのは、好悪(かうを)の如何(いかん)を超越した批判(ひはん)の沙汰(さた)に移らねばならぬ。今夜ふと菊池寛(きくちくわん)著す所の「極楽(ごくらく)」を出して見たが、菊池の小説の如きは粗とは云へても、終始雑俗の気には汚(けが)れてゐない。その証拠には作中の言葉が、善(よ)かれ悪(あ)しかれ満ちてゐる。唯一不二(ゆゐいちふじ)の言葉ばかり使つてないにしろ、白痴脅(こけおど)しの言葉は並んでゐない。あれはあれなりに出来上つた、他に類のない小説である。その点では一二の大家(たいか)先生の方が、遥(はるか)に雑俗の屎臭(ししう)を放つてゐると

思ふ。粗密は前にも書いた通り、気質の違ひによるものである。だから鑑賞(かんしやう)の上から云へば、菊池の小説を好むと好まざるとは、何人(なにびと)も勝手に声明するが好(よ)い。しかしその芸術的価値の批判にも、粗なるが故に許し難いとするのは、好む所に偏(へん)するの譏(そしり)を免れぬ。同時に又創作の上から云へば、菊池の小説は菊池の気質と切り離し難い物である　あの粗は決して等閑(なほざり)に書き流した結果然るのではない。その故に他の作家、殊に本来密を喜ぶ作家が、妄(みだり)に菊池の小説作法を踏襲(たふしふ)したら、勢(いきほひ)雑俗の病(へい)に陥(おちい)らざるを得ぬ。自分なぞは気質の上では、可也(かなり)菊池と隔(へだた)つてゐる。だから粗密

の好みを云へば、一致しない点が多いかも知れぬ。が、純雑を論ずれば、必しも我等は他人ではない。（十一月十二日）

（大正九年）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。